phylogeny of the Ranunculaceae VII. Sci. Rep. Osaka Univ. **16**: 21-43. Tanaka, N. & Tanaka, R. 1975. Karyograph as a karyotype expression. CIS **19**: 11-13. Tanaka, R. 1971. Types of resting nuclei in Orchidaceae. Bot. Mag. Tokyo **84**: 118-122.

* * * *

キンポウゲ科の16属33種（ボタン属とシラネアオイ属を含む）の植物の核形態を観察し，これらの植物の類縁関係を考察した。

3型の核形態が識別された。

第1の型：中間期核の染色質は顆粒状に，均等に染まり，凝縮塊は見られない。前期染色体は均質な糸状をしていて，真正染色質，異質染色質は見分けられない。

第2の型：中間期核には2-数個の小さな凝縮塊が見られる。その他の部分は不均等に染まり，また顆粒状を呈しない。前期染色体では両染色質は区別できるが，その境界は不明瞭である。異質染色質は染色体腕の基部，端部，介在部に分布する。

第3の型：中間期核には数個の，前型に比べ相対的にやや大きい凝縮塊が見られる。それらの周辺部はやや分散状で，他の部分との境界がやや不明瞭である。凝縮塊以外の部分はほぼ均等に，また前型に比べうすく染まる。前期染色体では両染色質は明瞭に区別される。異質染色質は染色体腕の基部に分布する。

第2の型は Langlet (1932) のR型，すなわち大形の染色体に，第3の型はT型，すなわち小形の染色体に対応する。第2の型はキンポウゲ亜科，クリスマスローズ亜科の植物で見られ，第3の型はシロカネソウ亜科，カラマツソウ亜科，オウレン亜科，ヒドラスチス亜科の植物で見られた。小さな染色体を持つタガラシとバイカモでは両染色質の分布パターンは同属の他の種と同じく第2の型を示した。

第1の型はボタン属のみに見られた。この結果はボタン属が他のキンポウゲ科植物と類縁がうすいという意見を支持するものである。

シラネアオイ属の基本数 x=10 はボタン属の x=5 と関連があるように思えるが，核形態の上からは両属は関連は認められない。

□初島住彦・天野鉄夫：**琉球植物目録** Flora of the Ryukyu. 230頁. 1977年10月. でいご出版社。1958年に出版された「沖縄植物目録」と全く同じ体裁であり，その改訂版であるが，新版では奄美群島まで収録範囲が広げられ，したがって書名も琉球と変えられている。前著からはずいぶん学名が変っているし，初島氏の「琉球植物誌」1971年と較べてもかなり学名の変更があり，新しく琉球に分布することのわかったものも目につく。琉球植物の解明には東南アジアの植物との比較研究は欠かせないもので，まだまだ長い年月と地道な研究が必要なことを感じる。 （山崎　敬）